

帰り花

小林守城

おーい野らよ
こんな小春日和に
ばかに悠々と
暢気そうじゃないか
福島やいわき平のほうはみんな
殺気だっているというのに

人間不信てなことは
きいたそらねーというわけか
もとより常在戦場
狂おしく殺気立つのは
恋猫の時だけと
決めているのだな
飼い主は里山
そう決めている野らは
悲しくて冷やかな目の賢い奴だ

うとうとと生死も問わず帰り花

野良着の母

小林守城

大正元年生まれのわたしの母は
百歳の柴田トヨさんより一つ年下
生きていればの話だが

少年のころあまや天屋のかわや厠で

五十年後はどうなると
いけないことをするように

考えていたことを思い出す

麻の種蒔きの日には
落ち葉や牛糞まじりの藁の堆肥に
家族の下肥をかけて仕上げる

雇人やていと一緒に肥やし作りをする
野良着の母は見たくなかった

迎えに行った水車小屋には
粉にまぎれた母がいて
ベロでわたしの目ん玉の
ゴミをぐるりと抉りだした
あの赤く濡れた夕暮れを
誰にも知られたくはなかった

少年のころ天屋あまやの廁かわやで
母も父もこの世にいない
五十年後の自分のことを
恐れていたことを思い出す

底なしのどろどろの
虚無的な堆肥の臭いを
蟬のように嗅いでいたのを思い出す